

## 「ノンネイティブ日本語教師交流会」を通して メキシコ・中米カリブ地域の参加者が得た学び

佐藤 志穂      栗原 幸子      イツェル・バルデス      エリカ・マトゥテ

### 要 旨

本稿では、国際交流基金メキシコ日本文化センターが実施している「ノンネイティブ日本語教師交流会」においてメキシコ・中米カリブ地域の参加者が得た学びについて報告する。インタビューによると、実行委員として企画・実施に携わる教師は「協働」「会の組み立て方」「会話のファシリテーション」について学んだ。また言語面について、自己評価に基づく参加者は CEFR A2 ～ B1 程度の目標言語行動 (Can-do) を概ね達成し、学習継続に対する動機付けを高めた。さらに文化面では事後アンケートから評価すると、参加者は他者に関心を抱きオープンな態度で会に臨み、自分との相違点のみならず相手との共通点を発見するなど、相互文化的能力を活用したコミュニケーションを実現することができた。

【キーワード】 メキシコ・中米カリブ地域 ノンネイティブ日本語教師  
CEFR A2 ～ B1 異文化交流 相互文化的能力

## Learning Experiences of Participants from Mexico, Central America and the Caribbean Through the “Exchange Session among Non-Native Teachers”

SATO Shiho, KURIHARA Sachiko, Itzel Valdés, Erika Matute

【Abstract】 This article summarizes the findings from the "Exchange Session among Non-Native Teachers" organized by The Japan Foundation, Mexico. Teachers involved in the planning and implementation, as committee members, learned about collaboration, meeting organization, and facilitation of conversations. Additionally, participants achieved proficiency levels ranging from CEFR A2 to B1, which effectively motivated them to continue their Japanese language learning journey. In terms of the cultural exchange and interaction, participants used their intercultural competence and facilitated meaningful cultural exchanges. They demonstrated interest and an open attitude towards others and acknowledged not only differences between themselves and others but also discovered commonalities.

【Keywords】 Mexico, Central America, Caribbean, non-native Japanese language teacher, CEFR A2 to B1, Intercultural Communication, Intercultural Competence

## 0. はじめに

「ノンネイティブ日本語教師交流会」(以下、交流会)は国際交流基金メキシコ日本文化センター(以下、JF メキシコ)が 2022 年 3 月にオンラインで開始し、2023 年 10 月現在も継続中の教師支援事業である。多様な母語・文化・経験をもつ日本語教師が Web 会議サービス Zoom に会し、「私の高校時代」「国の独特なお菓子」など身近なテーマに沿ってグループ会話を行うイベントである。本稿の目的は、交流会を通して、JF メキシコの主な支援対象であるメキシコ・中米カリブ地域<sup>1</sup>からの参加者が、企画・実施などの運営面と、グループ会話から言語面・文化面で得た学びを報告することである。

## 1. メキシコ・中米カリブ地域の日本語教育

はじめに、交流会を開始した背景として、メキシコ・中米カリブ地域の日本語教育の概況を述べる。2021 年度国際交流基金海外日本語教育機関調査によると当域には 1 万 7,562 人の学習者が存在する。機関種別で見ると、大学付属の言語センターや民間語学学校などの「学校教育以外」が 75% 以上を占め、主に趣味教養を目的として日本語が学ばれている。教師は 765 人おり、そのうち約 70% が日本語を母語としないノンネイティブ日本語教師である。当域には教師養成課程や資格試験などの評価制度が存在しないため、所属機関や独習で初級を一通り終えた段階、CEFR A2.1 程度<sup>2</sup>の日本語運用能力の者が教師として登用されたり、個人教授で日本語を教え始めたりすることも珍しくはない。ノンネイティブ日本語教師からは特に自身の日本語運用に関して次のような悩みを聞く。それは当域が距離的にも、時差上も日本と離れており、日常、日本語を使う機会が極めて少ないこと、ゼロ初級の学習者を対象としており授業で使う日本語が限られていること、まだ日本語を話すことに慣れていないため、口頭運用能力に自信が持てないということである。

JF メキシコはこのような状況を考慮し、当域の日本語教育の底上げを目指して教師を対象とした日本語研修や日本語教授法研修を行っている。本稿で報告する交流会は、日本語研修の一環として行っている事業で、次の 3 点を考慮し参加者を取って非母語話者教師に限定していることが特徴である。それは①ノンネイティブ日本語教師のエンパワメント、②日本語使用機会の創出とその真正性の保証、③言語文化教育観の変容である。1 点目について、上述のように日本語レベルがまだそこまで高くはなく、自身でも口頭運用能力に不安を抱いている教師が参加する心理的ハードルを下げたいと考えた。同時に、ほかの国にも同じ非母語話者教師として日々邁進する仲間が存在することを実感し、ノンネイティブ日本語教師として誇りを持ってもらえることを期待した。2 点目に関して、似た文化圏にあるスペイン語母語話者や日本語母語話者と話す場合は通常、お互いが共通して持つ前提に関して説明することはない。しかし、日本語・スペイン語を母語とし

ない人や文化が異なる人と話す場合にはこうした共通の前提が存在しないため、自らのことばを駆使して説明する必要が生じる。このような環境をつくることで、日本語を使う意義やその動機付けを高めたいと考えた。また現実世界において日本語を使う対象が必ずしも母語話者に限られないことを考慮しても、非母語話者と日本語で話すことは真正性のある日本語使用場面だと言える。さらに3点目について、日本以外の国や人にも興味を持ってことばを交わし理解を深めようとする態度は、言語文化教育に携わる者にとって重要である。この視点を持って非母語話者と日本語でコミュニケーションを取ることで、ネイティブの言語運用を至上とする考え方を捉え直してみたいという意図があった。

## 2. 交流会概要

様々な母語・文化・経験をもつ教師と日本語のみで交流する場が、当域の教師の日本語運用能力向上につながることを目指して、交流会は①日本語学習の動機付けと②異文化交流を大きな目的とした。以下、これまで行ってきた交流会の全体像を述べた後、人員体制、運営スケジュールなど準備手順について説明する。

まず、本交流会は、ラテンアメリカ<sup>3</sup>ともう1つの地域、2地域の教師計20～30人がZoomに会し、4人程度の多国籍グループでテーマに応じた約30分の会話を2回行う90分の会である。

表1に交流会の内容、時間および使用したZoom会議室の機能を示す。

表1 交流会の流れ

内容	時間	Zoom 会議室の機能
開会挨拶、趣旨説明	5分	メインルーム
アイスブレイク *グループ会話(1)のメンバーで行う	7分	ブレイクアウトルーム
交流会の目標言語行動 (Can-do) の確認 グループ会話における注意点のアナウンス	3分	メインルーム
グループ会話 (1)	30分	ブレイクアウトルーム
グループ会話 (1) のふりかえり	5分	メインルーム
グループ会話 (2) * (1) と異なるメンバーで行う	25分	ブレイクアウトルーム
全体のふりかえり	10分	メインルームで投票後 <sup>※</sup> ブレイクアウトルーム
まとめ (事後アンケート実施、写真撮影、閉会挨拶など)	5分	メインルーム

※ Zoom の「投票 (Polling)」機能を使って交流会の目標言語行動 (Can-do) の達成度を4段階で自己評価する

目的①②を目指して、できる限り様々な背景をもつ人と日本語でやりとりができるよう、会のメインとなるグループ会話はメンバーを替えて2回行っている。具体的には図1に示すようにブレイクアウトルームで、各参加者が事前に投稿していた Padlet の画像や動画、キャプションを適宜画面共有しながら会話をする。

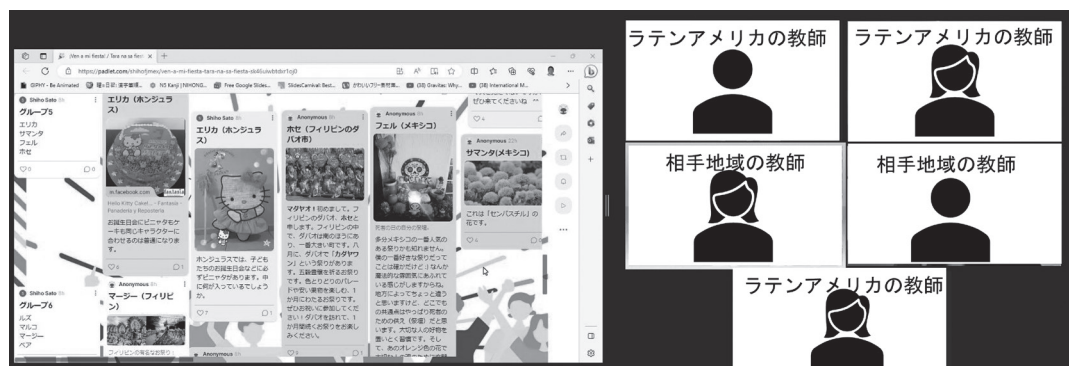


図1 Padletを用いたグループ会話の様子

ツールとしてPadletを採用したのは、利用登録不要で操作しやすく、文字に加えて画像や動画、リンクなど様々な素材を簡単に添付できるなど利便性が高いためである<sup>4</sup>。また参加者のレベルであるCEFR A2～B1の「話す」言語行動は、「メモをとときき見れば」「あらかじめ準備すれば」「リハーサルすれば」などの条件がついていることが特徴である。このレベルに合った活動を行うため、事前に話す内容を準備しておくことができ、かつ当日も参照できる媒体としてPadletが適切であると考えた。

次の表2にこれまでの交流会の実施時期、相手地域、各地域の参加人数、テーマを示す。

表2 交流会実施歴

回	時期	相手地域	ラテンアメリカ 参加人数	相手地域 参加人数	テーマ
1	2022年3月	タイ	18	17	私の高校時代
2	2022年5月	中東・北アフリカ	9	8	来てほしい！私の国の観光地
3	2022年7月	タイ	11	11	朝ごはんの風景
4	2022年10月	ベトナム	13	13	旅行の思い出
5	2023年1月	インドネシア	13	15	国の独特なお菓子
6	2023年5月	韓国(学習者)	11	3	私の夏の過ごし方
7	2023年7月	フィリピン	13	7	フィエスタにいらっしやい！
8	2023年10月	フィリピン マレーシア	8	5 1	国の伝統的な服

上記の目的①②を達成するためには、会を継続的に実施していくことが理想的であると考え、2～3か月に1回のペースで実施している。相手地域は、時差上実施可能な国際交流基金海外拠点にJFメキシコから声をかけ、現地のノンネイティブ教師の日本語運用能力や定員などの観点を検討したうえで決定している。定員はラテンアメリカで20人程度、相手地域も同程度としている。これはJFメキシコが実施しているオンライン教師

研修は通常申込者が 20 ～ 50 人程度で参加率が 60 ～ 70% であること<sup>5</sup>、当日のブレイクアウトルーム作成作業や参加者全体を観察しサポートする上での便宜を考慮したためである。ラテンアメリカからの参加者は各回平均 12 人で、大学付属の言語センターや民間語学学校、個人教授などで一般向け日本語教育に携わる教師である。日本語運用能力は CEFR A2 ～ B1 レベルで、母語はスペイン語、教授歴は 1 年～ 3 年程度の若手教師と 4 年～ 10 年程度の中堅教師が中心層を占め、経験が 1 年未満の教師や 10 年以上のベテラン教師からの参加はほぼない。また、第 3 回～第 8 回における各回の初回参加者とリピーター参加者の割合はおおよそ 4:6 である。相手地域からも各回 10 ～ 15 人、同程度の日本語運用能力と教授歴を有する教師が集まっている。テーマは実行委員および相手地域担当者と相談しながら、参加者の興味関心や話しやすさなどを考慮して決めている。そして交流会の企画・実施・準備は、次の表 3 に示す人員体制で行っている。

表 3 人員体制

人員	役割
JF メキシコ付日本語専門家（2 人）	- 交流会の企画・実施・準備の主導 - 実行委員会とりまとめ - 当日の主な司会進行
実行委員（6 人程度） ※メキシコ・中米カリブ地域の有志教師	- 交流会準備への協力 - 当日の一部司会進行
相手地域担当者（1 ～ 3 人） ※ JF 海外拠点付日本語専門家・講師・スタッフ	- 交流会の企画・実施・準備への協力 - 当日のオブザーブ・テクニカルサポート

この人員体制のもと、表 4 に示す運営スケジュールに沿って準備を進めている。

表 4 運営スケジュール

時期	準備内容
約 2 か月前から	① 相手地域担当者と実施日、運営スケジュールの決定 ② 実行委員会開始（以降、定期的に実施） ③ 交流会のテーマおよび目標言語行動（Can-do）の決定 ④ 申込フォーム・電子チラシ・案内文など広報素材の作成
約 3 週間前から	⑤ 参加者募集
1 週間前	⑥ 参加者募集締切 ⑦ 参加者への連絡（Padlet 投稿呼びかけ、当日の手順など）
3 ～ 2 日前	⑧ Padlet 投稿締切 ⑨ グループ分け
1 日前と開会 30 分前	⑩ Zoom 会議室情報の通知
	交流会当日

準備は約 2 か月前から始める。①は JF メキシコと相手地域担当者間でメールや Zoom で協議する。②実行委員会でテーマを 2 ～ 3 挙げたのち相手地域担当者と相談し、参加者の興味関心やその国のタブーなどを考慮しながら決定する（③）。その後 JF メキシコ



で交流会の目標言語行動 (Can-do) を設定し、相手地域の確認を仰いで決定する。④の広報素材は JF メキシコが作成し、相手地域担当者と共有する。⑤広報はラテンアメリカと相手地域とで分けて行う。ラテンアメリカにおける主な広報媒体は JF メキシコが運用する日本語教師向け Facebook ページ「El Patio」(<https://www.facebook.com/Elpatiofjmx/>) やメキシコ日本語教師会のメーリングリストである。また実行委員を務める教師が仲間を誘ったり、JF メキシコ付日本語専門家が研修などを通して知り合った教師にメールやメッセージングアプリ WhatsApp でお知らせしたりと個別的な広報も行っている。交流会の1週間前、参加者募集を締め切って以降⑥～⑩の段階では、JF メキシコがラテンアメリカの、相手地域担当者が対象国の申込者へ、それぞれメールにて各種通知を行う。

運営上特に工夫している点は、締切までに Padlet に投稿した人に限って Zoom 会議室の ID とパスワードを通知していることである。参加申し込みをしたが当日現れないことを予防するため、また初対面の参加者ができるだけ緊張しないで話し合えるよう、事前に同程度の日本語運用能力の者同士でグループを組んでおくためである。実際この方法は参加率を高めるのに役立っており、ラテンアメリカ地域の各回平均参加率は 82.2% である。

### 3. 実行委員会

本章では交流会の特色である実行委員会について述べる。実行委員会は第3回交流会の準備時より設置したもので<sup>6</sup>、JF メキシコ付日本語専門家2人と交流会のリピーター参加者である実行委員から構成される。実行委員を置くねらいは、①教師としての成長、②教師ネットワークの形成である。会の企画・実施に関わることを通して①②を促し、やがては実行委員の教師たちが自身で交流会およびそれに準ずる教師または学習者向け事業を企画・実施できるようになることを目指している。2023年10月現在、メキシコ(3人)、ホンジュラス(2人)、グアテマラ(1人)の6人の教師が実行委員として活動している<sup>7</sup>。教授経験は2年が1人、4～6年が3人、7～10年が2人と中堅教師が中心で、日本語レベルはA2程度が1人、B1程度が5人である。

交流会当日における実行委員の主な仕事は、表2の「アイスブレイク」「グループ会話」と「まとめ」における実行委員募集である。まず、アイスブレイクでは、実行委員が司会進行を担当している。続くグループ会話では実行委員も参加者として交流しつつ、ほかの参加者たちの会話がスムーズに進むよう配慮するなど、ファシリテーターの役割を務めている。最後のまとめでは、ラテンアメリカの参加者たちを対象に、次回交流会に向けた実行委員募集を行っている。

これらの仕事を行うにあたり、JF メキシコの招集に応じて交流会前に月に2回程度、

各回約 30 分の Zoom 会議を持っている。JF メキシコが議題の選定や会議の進行を行い、実行委員がテーマのアイデアを出したり、当日の司会を分担したり、アイスブレイクで行う活動を決めてスライドを作成するなどの準備に協力する。会議における言語は、JF メキシコ日本語専門家が話すときは主に日本語を使用するが、実行委員同士で話す際は、協働がしやすいよう日本語とスペイン語いずれの言語を使用してもよいこととしている。

#### 4. 企画・実施に関する学び

実行委員として交流会の運営に携わることが、実行委員会設置の目的に、どのように寄与しているかを検証するため、JF メキシコから実行委員 6 人にインタビューを行った。インタビューは Zoom で一人あたり約 30 分行い、「どうして実行委員になろうと思ったんですか」と「実行委員の仕事から、何か学んだことはありますか」という 2 つの問を中心に対話形式で行った。インタビュー内容から、実行委員は大きく「協働」「会の組み立て方」「会話のファシリテーション」の 3 点において学びを得ていることが明らかになった。

##### 4.1 協働

まず協働について、実行委員 6 人全員から、仕事を分担しながら会の準備を進める方法がわかったという点が挙げられた。具体的には次の趣旨の発言があった<sup>8</sup>。

- ・実行委員会で WhatsApp グループを作って会議をいつ行うか、スケジュール調整をするなど、会の準備手順がわかりました。
- ・仕事を分け、担当を決め、実行するという流れがわかりました。

また、次の発言からは、互いに意見を交わしながら意思決定する方法についても学びがあったことがうかがえる。

- ・(テーマ選びのとき) だれかと何かを決めるときの方法がわかりました。ほかの人の意見を聞いて尊重します。また自分の意見とそうのように考える理由も言いながら、全員が合意できるアイデアを選んでいきました。
- ・(テーマ選び、アイスブレイクの内容の話し合いのとき) これまで自分になかった観点からアイデアが得られました。

テーマ選びとアイスブレイクの内容は、基本的に、JF メキシコ側は入ることなく、実行委員のみでブレイクアウトルーム 1 室に入って話し合う。第 3 章で述べた実行委員設置の目的①②に対応すべく、できる限り主体的にチームで相談し決定を下す経験を積んでもらいたいと考えているためである。

## 4.2 会の組み立て方

会の組み立て方については、ある実行委員から、会の構成、特にアイスブレイクの大切さに気づいたという話があった。

- ・初めて出会う人が集まる場。いきなりグループ会話が始まるのではなく、アイスブレイクがあることでより話しやすくなると思います。自分の所属機関でクラス間交流を行うときにもアイスブレイクを取り入れるようになりました。

またテーマ選びの視点についても学びがあったことが見受けられる。

- ・「子どものころの思い出」など、人によっては悲しい話やつらい話になるかもしれないテーマは最終的には選びませんでした。
- ・いろいろなレベルの人がいることを考慮して選んでいます。同じく、所属機関のクラス間交流を行う際に、本交流会で採用したテーマを再利用してみました。

テーマ選びの際は交流会の参加者が話しやすいように、JF メキシコから次の4つのポイントを提示している。①自分の経験が話せる、②みんなが気軽に楽しく話せる、③質問しやすい、④人によっていろいろな習慣がある。実行委員もまたこれらのポイントを踏まえながら参加者の立場に立ってテーマを選んでいることがうかがえる。

## 4.3 会話のファシリテーション

グループ会話では1グループあたり一人の実行委員が入る配置にしている。そこでインタビューでは「会話がスムーズになるように、楽しく話せるように、何か気をつけていることや、やってみたことは、ありますか」という点も尋ねてみることにした。すると、次のような回答があった。

- ・画面共有できない人がいれば自分が代わりに共有します。共有方法がわからない人にはその方法を教えてあげます。
- ・ブレイクアウトルームに入ったら早くほかの先生たちの顔を見て、MCとして始めます。早く画面を共有して、早く参加者に話してもらいます。「誰からはじめましょうか。」と言ってみます。誰も答えない場合は自分からお願いします。話していない人がいたら、「〇〇さんはどうですか」とか、と言ってみます。私にほとんど話すチャンスがなくても、大丈夫です。他の人に話すチャンスをあげます。

これらの発言から、実行委員は特に話の立ち上げに注意を払ってふるまっていることがわかる。実行委員が話し始める役を進んで務めることで安心感が生まれ、次の人が発言しやすくなると思われる。



また、参加者の発言を促す工夫として次のようなコメントがあった。

- ・あまり話さない人がいたんですが、(私は)できるだけたくさん質問をしました。参加してもらいたかったですね。「へー」とか「うん」とか、あいづちもたくさんあげました。
- ・ひとりの人がずっと話しているようなときは、中断するのではなく、ポーズができたタイミングで他の人に質問するようにしました。たとえば、「私の国はあつくて…」という話で一人が続けて話しているとき、「えー、いつもそんなに暑くなるんですか、〇〇さん？」と別の人に質問したことがあります。

参加者の気持ちに配慮しつつも、相手にそうとは気づかせない自然な形でほかの参加者に発言のチャンスを与えられるよう意識して行動していることが見える。

さらに、時間管理についても言及した実行委員があった。

- ・みんなが話せるよう時間管理をするようにしています。自分が話すときも時間を守るようにし、他の人が順番に話していくうちに時間が少なくなってきたとき、自分が最後に回って簡潔に話すことにしました。

グループ会話では約 30 分で 4 人程度が話す。この実行委員はタイムキーパーの役割を買って出て、それぞれの参加者の発言機会が担保できるよう工夫しているとのことであった。

以上、企画・実施に携わることを通して実行委員が「協働」「会の組み立て方」「会話のファシリテーション」について学び、教師としての視野を広げていることを提示した。これは特に実行委員設立の目的①「教師としての成長」に対応する成果であると言える。

## 5. 言語・文化に関する学び

本章では事後アンケート<sup>9</sup>の結果をもとに、交流会の目的①日本語学習の動機付けと②異文化交流の成果を検証する。①に関しては第 1 節で述べる。会の目標言語行動 (Can-do) に対する自己評価に基づく、参加者が自分の言語能力を適切に捉えるのを促すことができたと言える。さらに会の有意性に関する記述回答においても「自信」や「達成感」「うれしい」といったことばが見られ、特に学習を継続するための動機付けに寄与することができた。次に②については第 2 節の文化面で述べる。参加者が交流会の中で相互文化的能力 (Intercultural Competence)<sup>10</sup> を運用し、有意義な交流が実現できたことが成果である。

### 5.1 言語面

交流会では目的①を目指し、漫然と雑談するのではなく意味ある会話ができるよう毎回目標となる言語行動を Can-do の形で設定している。目標は「みんなの Can-do サイト」

(<https://www.jfstandard.jp/jf.go.jp/cando/top/ja/render.do>) から参加者の日本語運用能力に合った CEFR A2 ～ B1 レベルの Can-do Statements を参照し作成している。たとえば「フィエスタ<sup>11</sup>にいらっしゃい！」がテーマであったフィリピンの教師との交流会は、次の CEFR A2 レベルの Can-do Statements を参考にした。

- ①身近な話題について、リハーサルをして、短い基本的なプレゼンテーションができる。(CEFR A2.1)
- ②もし必要がある場合に相手が助けてくれれば、予め決まっているような状況、短い会話でなら、比較的容易に対話ができる。余り苦勞しなくても日常での簡単なやり取りができる。予測可能な日常の状況ならば、身近な話題についての考えや情報を交換し、質問に答えることができる。(CEFR A2.2)

ここからテーマを具体化したり、簡潔な表現に書き改めたりして次の2つの目標を立てた。

- ① (Padlet を使いながら) 家族や友人とのフィエスタ、住んでいるまちのフィエスタなど、自分にとって大切なフィエスタについて何のためにどんなことをするか、どう思うかなどを話すことができる。
- ②フィエスタについて、短い簡単なことばで質問したり、質問に答えたりして会話を続けることができる。

そして「日本語学習への動機付け」につなげるために、事後アンケートでは目標達成度を自己評価してもらっている。評価指標には星(★)を使い、「これからがんばります(星1つ:★☆☆☆)」「もう少しできそう(星2つ:★★☆☆)」「できた(星3つ:★★★☆☆)」「よくできた(星4つ:★★★★)」という4段階で達成度を測る形である。達成度の選択に加え、自己評価の理由も簡単に記述してもらっている<sup>12</sup>。

まず目標①は、星の数は平均して3.2で、概ね「できた」と自己評価されていた。記述回答に目を向けると、次のように、自身ができたことと、できなかったことを説明するコメントがあった。

- ・メインとなるメッセージは伝えられましたが、出てきた質問をもっと深められたらよかったと思いました。(原文はスペイン語)
- ・紹介したゲームのルールが通じなかったと思いました。説明するとき、はじめから順番に、ではなく、ある点からほかの点まで飛んでしまいました。でも、コメントや質問が出たりするくらいには理解してもらえたと思います。(原文はスペイン語)

また目標②においても星の数は平均3.5で、概ね「できた」と自己評価されていた。記述回答では特に自分の語彙の使用についてふりかえる視点が見られた。

- ・したい質問をするのに語彙が足りないと思うことがありました。(原文はスベ

イン語)

- ・会の前に少し、テーマについての語彙を復習したので、質問をしたり答えたりするのに問題はなかったと思います。(原文はスペイン語)

このように自分のパフォーマンスを顧みること、現在の能力でできることや改善点をより明確に捉えることができる。目標との差を適切に認識できれば、能力向上に向けた行動も計画しやすくなるだろう。交流会への参加が実際にその人を日本語学習に向かわせたかどうか、その行動までを事後アンケートのみから判断することはできない。しかしこれらの内省を見ると、少なくとも自分の能力を客観的に認識するという学習の出発点を据えることには貢献できたと言えるのではないだろうか。

また、事後アンケートでは交流会の有意性も尋ねており<sup>13</sup>、各回平均 95.8%の参加者から「とても有意義だった」または「有意義だった」という回答を得ている。その回答理由に目を向けると、次のように動機付けに関連するキーワードが見られる。

- ・このようなイベントがあれば日本語を練習できるし、日本語に同じく興味を持つ人と出会うことができます。それは自分が勉強を続けるモチベーションになります。(原文はスペイン語)
- ・テーマについてすべてを話し、理解するのにはまだ苦勞しましたが、日本語で話すときに自信が持てるようになるための助けとなりました。(原文はスペイン語)
- ・カリ（コロンビアの町―報告者注）やコロンビアの文化的側面について伝えることができ、達成感を持っています。たとえば、まちのライトアップがあったり、サルサのお祭りがあったりするなど、12月に行われる様々なイベントなど、食べ物やおどりの大切さについて。(原文はスペイン語)
- ・あまりこういうような話す機会がないので、とても上手な人と会話できると嬉しいなんです。違う文化のいろんなことをも学べたので最高でした。(原文ママ)
- ・自分の国のことや言いたかったことも、例えば、自分の経験や聞いたことも伝えられて、うれしいです。(原文ママ)

J・M・ケラーが1980年代に提唱した動機付けに関する「ARCSモデル」によれば、学習意欲を高める要素には「Attention（注意喚起）」「Relevance（関連性）」「Confidence（自信）」「Satisfaction（満足）」の4つがある（J.M. ケラー 2010：47-48）。コメント太字下線部の「自信」「達成感」「うれしい」といったことばはARCSの要素のうち「Confidence（自信）」「Satisfaction（満足）」に対応しており、この2つは特に学習継続の意欲を高める要素である。上記のような声からも、交流会が学習継続のための動機付けを促している証拠を得ることができたと考えられる。

## 5.2 文化面

交流会の目的②異文化交流について、事後アンケートの記述回答を整理すると、参加者が相互文化的能力（Intercultural Competence）を運用する機会をつくることができたという成果が得られたことがわかる。相互文化的能力とは、様々な文化が存在するあらゆる社会の中で互いを理解し尊重する能力のことで、パイラム（2015：245）によれば、「態度」「知識」「考え行動するスキル」の3つの構成要素から成る。以下、メキシコ・中米カリブ地域の参加者が、国や文化の異なる様々な地域の教師と日本語でコミュニケーションする中で、具体的にどのような相互文化的能力を使ったのかを考察する。

まず参加者が相手の使う日本語に注意を向け、興味を持っていることが見えるコメントを取り上げる。

- ・新しい人を知り会うことが大好きで、違った日本語のアクセントを聞くことに興味があります。（原文ママ）
- ・理解する力を養うのに、ノンネイティブの先生方の、違ったタイプのアクセントを聴くのは大切だと思います。（原文はスペイン語）
- ・聴き慣れたものとは異なった日本語のアクセントを聞き取るのは私にとってチャレンジでした。（原文はスペイン語）

ここからは他者に対する関心や、母語話者が話す日本語ともスペイン語話者が話す日本語とも異なる日本語に対する開放性が見え、参加者が相互文化的能力を支える「態度」を示していることがわかる。また、次のコメントからは参加者の新鮮な驚きがうかがえる。

- ・お菓子の中には見た目や材料が似ているものがありました。また（ラテンアメリカでは一報告者注）野菜として材料として食べられているものがインドネシアではジュースやデザートとして食べられていることがわかりました。これには驚きました。（原文はスペイン語）

このように必ずしもステレオタイプに囚らない新しい発見をすることもまた、「自身のおかれた環境下」にあるものの中にある「当然とされていることについて疑問を投げかけようとする」（パイラム 2015：245）相互文化的態度であると言える。

続いて、参加者が運用した「発見と相互交流のスキル」に目を向ける。まず、似た文化の中に存在する違いに気づいたというコメントを挙げる。

- ・メキシコと韓国の文化について習えました。メキシコの文化はペルーの文化と同様な国だと思いましたが、マンゴナダ（マンゴーの果肉やシャーベットにチリパウダーや梅ソースをかけたデザートー報告者注）やプールでバーベキューができることなどを知りませんでした。（原文ママ）
- ・インドネシアの様々なデザートについて聞く機会を得られました。インドネシアの先生の中でも、みんなが同じおかしについて知っているわけではあり

ませんでした。みなさんシンプルかつはっきりと説明してくださったので、ひとりひとりの先生が言ったことを理解することができました。(原文はスペイン語)

- ・今回の出会いと交流はたいへん興味深く、楽しかったと思います。それぞれの人にとってとても重要な時期について知ることができました。同じ国であっても、その人自身の年齢や時代（その人が高校生だった時代—報告者注）に応じて、文化的さらには社会的な側面は異なります。(原文はスペイン語)

特に太字下線部から、参加者が、似た文化圏や同じ国の中であっても、そこで生きる個人に目を向けてみれば異なる点があると認識していることがわかる。

一方、これまで違うと思っていた文化との共通点を見出した参加者もあった。

- ・典型的な朝ごはんについてシンプルに話すことができたと思います。タイの先生に、見せてもらった食べ物について詳細を質問することもできたと思います。タイとホンジュラス、メキシコの食べ物を比べて、共通点を見つけることができました。(原文はスペイン語)
- ・文化的な交流に加えて、私たちは国籍関係なしに、あらゆる面でよく似ているということを再認識しました。(原文はスペイン語)

このように似た文化の中の相違点や、異文化の中の共通点に気づきがあったことは、参加者が「発見のスキル」を実際に使って、「ある文化とその文化の習慣についての新しい知識を習得」(バイラム 2015：248)できたことの表れであると言える。

以上は、見たことや聞いたこと、つまり受容面での相互文化的能力の運用例である。一方次のコメントからは、産出面でも相互文化的能力が使われていることがわかる。

- ・ほかの国の人が知らない新しいことを説明することができるというのは大切なことだと思います。自分にとっては日々身近なことでも、ほかの人にとってはそうではありません。このような能力を持っておくことは素晴らしいと思います。(原文はスペイン語)
- ・習慣が違いますから、国の料理や作り方について話すのはチャレンジでした。国の料理の作り方は普通に見えるけど、作り方が全然わからない人にわかりやすく説明できるのはおもしろかったです。(原文はスペイン語)

このように自分自身や自文化について相手が知らないことを考慮しながら、わかりやすく説明する能力は、「リアルタイムでコミュニケーションと相互交流を行うという制約のもとで、知識、態度、スキルをうまく操作する」(バイラム 2015：248)という「相互交流のスキル」に対応している。

以上、事後アンケートの記述内容を取り上げながら、相互文化的能力という観点から文化面における参加者の学びを考察した。その結果、参加者は他者に対して関心を持つ



てオープンな態度で接しており、相互文化的能力のうち特に「発見と相互交流のスキル」を運用しながらコミュニケーションができたことが明らかになった。

## 6. まとめと今後の展開

ここまで、「ノンネイティブ日本語教師交流会」を通してメキシコ・中米カリブ地域の参加者が、会の運営面、言語面、文化面それぞれの観点から得た成果について述べてきた。実行委員として企画・実施に関わる参加者にインタビューした内容からは、彼らが「協働」「会の組み立て方」「会話のファシリテーション」などを学び、教師として視野を広げていることがわかった。言語面では、参加者が各回の CEFR A2 ～ B1 レベルの目標言語行動 (Can-do) を概ね達成できたと自己評価しており、評価の理由の記述内容からは自己の日本語運用能力を客観的に捉えることができていたことが明らかになった。さらに「自信」「うれしい」「達成感」といった満足の声もあり、交流会が日本語学習継続の動機付けを促していることも確認できた。文化面では、事後アンケートから、次の 2 点において相互文化的能力を活用した交流が実現されていることを確かめることができた。それは参加者が他文化や他の教師が話す日本語に関心を抱き、寛容な態度で会話に臨んでいる点、他者・他文化との相違点に加えて、自文化の中の多様性や他者・他文化との共通点も発見しながら交流するスキルを運用している点である。JF メキシコで行っているその他の教師向け日本語研修・日本語教授法研修は、メキシコ・中米カリブ地域の教師を主な対象としているため他地域の教師が入ることは稀である。母語が異なる人、多様な文化・経験をもつ人と、ノンネイティブ日本語教師という共通項を通してつながることができる点、日本語を介した相互理解を教師自らが体験できる点は、本事業ならではの特長である。

ただし、言語・文化面での学びについて、本稿では深く内省できていると判断したコメントを取り上げた限りであることを断っておかなければならない。事後アンケートに未回答の人がいるのはもちろんのこと、「とても良かった」「練習できた」「楽しかった」など漠然とした感想に留まっている人がいることも確かである。今後はより多くの参加者がより具体的にふりかえることを目指したい。たとえば 2023 年 10 月準備中の第 8 回交流会では自分のパフォーマンスや文化について気づいたことを口頭で共有する時間を設ける予定である。

加えて、交流会の展開として、実行委員の中に学習者向け交流会を企画・実施した教師がいることを挙げておきたい。グアテマラの教師は中米カリブ地域の学習者を対象にオンライン交流会を行った。またホンジュラスの教師は日本国大使館が主催するイベントで学習者向け交流セッションを実施した。さらにメキシコの実行委員の 1 人は、交流会で知り合ったタイ人教師と共同でオンライン学習者交流会を 2 度行った。これらは実

行委員がノンネイティブ日本語教師交流会から学んだ成果を別の場で活かした実例で、実行委員会設置の目的である「教師としての成長」「ネットワーク形成」が確かに実現されていることを示す有意義な取り組みである。ただし、これらの展開はまだ実行委員を務めた一部の教師が個人的、単発的に行った事例に留まる。そこで今後はこのようにイベントを企画・実施した経験を持つ教師が、ほかの教師とその経験やノウハウを共有する機会を設ける。そして次はイベント実施経験のない教師が主体となって学習者向け・教師向け企画を立案・実施していけるようサポートしていきたい。

メキシコ・中米カリブ地域にはノンネイティブ日本語教師が持続的に日本語や日本語教授法を学ぶ場はまだなく、スキルアップは教師個人の自主性に任されている。交流会はノンネイティブ日本語教師という共通点から親近感を持ち安心して日本語を使える場、日本語を介して新しい人・新しい世界とつながる喜びを味わえる相互理解の場として確かに機能している。さらにここで得られる、日本語でコミュニケーションができたという満足感や自信、ことばを交わして相手を知り自分をも再発見する喜びは外国語学習を継続する意欲につながる。教師自身が異文化理解を深めながら前向きに日本語学習を続けていけるよう、今後も様々な地域との交流会を継続していきたい。

## 注

1. 2021 年度国際交流基金海外日本語教育機関調査において日本語教育機関が確認されている次の国を指す。メキシコ、エルサルバドル、キューバ、グアテマラ、コスタリカ、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、ドミニカ共和国、ハイチ、パナマ、プエルトリコ、ベリーズ、ホンジュラス
2. たとえば CEFR A2.1 レベルの「口頭でのやりとり全般」の言語行動は次のとおりである。「仕事や自由時間に関わる身近な日々の事柄について、直接的で簡単な情報交換を必要とする通常の課題ならコミュニケーションできる。非常に短い社交的なやり取りには対応できるが、自分から会話を進められるほどの理解はない。」
3. 南米スペイン語圏であるアルゼンチン、コロンビア、ボリビア、ベネズエラ、ペルーから参加があった回もあることから、中米カリブ地域スペイン語圏をまとめて「ラテンアメリカ」と表記する。これまで中米カリブ地域のうち、プエルトリコ、英語圏であるジャマイカ、トリニダード・トバゴ、ベリーズ、フランス語圏であるハイチ、一般市民が Web 会議を行うことに制限があるキューバからの参加はない。
4. Padlet は読み上げ機能にも対応しており、視覚障害のある参加者にとっても使いやすいとのことであった。
5. 参考までに 2022 年度 JF メキシコが実施したオンライン日本語教師研修は 25 件あり研修参加者は合計 372 人、平均参加者数は 17 人であった。

6. 第1回と第2回はJF メキシコと相手地域担当者のみで企画・実施した。第2回終了時に運営者間で交流会のふりかえりを行った際に、参加教師自身で交流会の企画実施ができるようになればさらなるスキルアップ、教師間ネットワーク形成につながるのではないかというアイディアが提案された。それを機にJF メキシコ側で実行委員を設けることとした。
7. 参加しやすさを期して、実行委員会は定員や任期などは設けていない。会ごとに興味関心のある参加者に加入してもらい、自分のできる範囲で仕事を担当する。第3回から第8回準備まで継続的に実行委員を務めているのが6人で、そのほか単発で務めた人が2人いる。
8. 実行委員の発言内容は適宜スペイン語を日本語に翻訳したり、言語形式の誤りを修正したり、趣旨をまとめたりと報告者側で調整を加えている。一方、誤用が含まれる場合は意味が通る程度であれば修正せず、できる限りもとの発言のまま表記している。
9. ラテンアメリカの参加者を対象としてMicrosoft Formsを用いて行い、各回平均回答率は91.2%である。なお、相手地域でも同様の事後アンケートを行っており、各回平均回答率は92.4%である。
10. Intercultural Competence は「異文化間能力」や「異文化理解能力」と訳されることがある。本稿では、引用するバイラム (2015) における訳語に従って「相互文化的能力」とする。
11. fiesta はスペイン語にもタガログ語にも存在する語である。スペイン語では地域・国の公の祭り、誕生日会や家族の集まりなどの私的なパーティーの両方を指す。一方、タガログ語では公の祭りのみを指し、私的な集まりに対しては party が用いられる。
12. 内省を促すことが目的であるため質問はスペイン語と日本語併記とし、回答の際も両言語どちらで記述してもよいこととしている。
13. 「今回の交流会は有意義でしたか」という問に対して、「とても有意義だった」「有意義だった」「どちらともいえない」「あまり有意義じゃなかった」「全然有意義じゃなかった」の5段階から選択する形式である。相手地域でも同じく5段階で有用性を評価しており、各回のアンケート回答者全員から「とても有意義だった」または「有意義だった」という回答を得ている。

## 参考文献

国際交流基金 (2023) 「海外日本語教育機関調査 (2021 年度)」 < <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html> > (最終閲覧 2023 年 9 月 24 日)

J.M. ケラー（著）鈴木克明（監訳）（2010）『学習意欲をデザインする—ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房

マイケル・バイラム（著）細川英雄（監修）山田悦子・吉村由美子（訳）（2015）『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店

本報告は 2023 年 8 月に開催されたオンラインシンポジウム第 7 回「未来志向の日本語教育」における口頭発表の内容を発展させたものである。

